

刑事 コロンボ

研究 上

菊地成孔

20世紀テレビドラマ史上屈指の名作に
新世紀のライトをあてる かつてない

内容補完の
ために制作した
オリジナル
音源つき

倒叙とは何だったのか? 1&2
精神分析の作法 / 本人インタ
erviewの推奨

「刑事コロンボ」論にして
20世紀文化論!

稀代の音楽家 / 文筆家・菊地成孔、初の書き下ろし新書!

「の」の法則 / 転移の
連鎖としての殺人 / リサ概念 / アイスお父さん概念 / ヒッ
チコック「泥棒成金」論 / 「欺かれぬ者は彷徨う」 / パス概念

「罪と罰」説の否定 /
「ビュー」を信用しない /

刑事コロンボ研究 上

菊地成孔

星海社

334



「君の名推理を聞いているとイライラしてくるんだよ」「はい。みなさんそうおっしゃいます」

(「*」)

〈「刑事コロンボ」全話区分一覧表〉

本書内での「刑事コロンボ」全話を区分し、表記の統一基準となる一覧表を掲示する。

上から順に「全話の通し番号」／「シーズン&エピソード番号」「原題」「邦題（放映題）」「西暦」「和暦」である。これらは全て、本書内で明記している、国産のコンテンツに依拠している。

本書内で初出の話は〈11/2-2/72〉「悪の温室」と表記する。これは洋暦であり「コロンボ暦」とする。（*例外的な特記時に於いてのみ和暦^お「コロンボ和暦」を使用する）

* 「西暦」は合衆国での初放映年月日である。

** 「和暦」は通し番号1～45まではNHK総合での初放映年月日、それ以降はNTVの初放映年月日である。

No.	SE-ep	原 題	邦 題	西 暦	和 暦
1	pre-Tvmovie	Prescription: Murder	殺人処方箋	'68 (2/20)	'72 (12/31)
2	pre-Pilot	Ransom for a Dead Man	死者の身代金	'71 (3/1)	'73 (7/7)
3	1 - 1	Murder by the Book	構想の死角	'71 (9/15)	'73 (8/25)
4	1 - 2	Death lends a Hand	指輪の爪あと	'71 (10/6)	'73 (7/28)
5	1 - 3	Dead Weight	ホリスター將軍のコレクション	'71 (10/27)	'73 (7/14)
6	1 - 4	Suitable for Framing	二枚のドガの絵	'71 (11/17)	'73 (7/21)
7	1 - 5	Lady in Waiting	もう一つの鍵	'71 (12/15)	'73 (8/18)
8	1 - 6	Short Fuse	死の方程式	'72 (1/19)	'73 (9/1)
9	1 - 7	Blueprint for Murder	バイルD - 3の壁	'72 (2/9)	'73 (8/11)
10	2 - 1	Étude in Black	黒のエチュード	'72 (9/17)	'74 (4/6)
11	2 - 2	The Greenhouse Jungle	悪の温室	'72 (10/15)	'74 (5/4)
12	2 - 3	The Most Crucial Game	アリバイのダイヤル	'72 (11/5)	'74 (5/18)
13	2 - 4	Dagger of the Mind	ロンドンの傘	'72 (11/26)	'74 (4/20)
14	2 - 5	Requiem for a Falling Star	偶像のレクイエム	'73 (1/21)	'74 (6/15)
15	2 - 6	A Stitch in Crime	溶ける糸	'73 (2/11)	'74 (6/8)
16	2 - 7	The Most Dangerous Match	断たれた音	'73 (3/4)	'74 (4/13)
17	2 - 8	Double Shock	二つの顔	'73 (3/25)	'74 (7/20)
18	3 - 1	Lovely but Lethal	毒のある花	'73 (9/23)	'74 (9/14)

No.	SE-ep	原 題	邦 題	西 暦	和 暦
19	3 - 2	Any Old Port in a Storm	別れのワイン	'73 (10/7)	'74 (6/29)
20	3 - 3	Candidate for Crime	野望の果て	'73 (11/4)	'74 (8/17)
21	3 - 4	Double Exposure	意識の下の映像	'73 (12/16)	'74 (8/10)
22	3 - 5	Publish or Perish	第三の終章	'74 (1/18)	'74 (12/14)
23	3 - 6	Mind Over Mayhem	愛情の計算	'74 (2/10)	'74 (8/31)
24	3 - 7	Swan Song	白鳥の歌	'74 (3/3)	'74 (9/21)
25	3 - 8	A Friend in Deed	権力の墓穴	'74 (5/5)	'74 (10/5)
26	4 - 1	An Exercise in Fatality	自縛の紐	'74 (9/15)	'75 (12/27)
27	4 - 2	Negative Reaction	逆転の構図	'74 (10/6)	'75 (12/20)
28	4 - 3	By Dawn's Early Light	祝砲の挽歌	'74 (10/27)	'76 (1/10)
29	4 - 4	Troubled Waters	歌声の消えた海	'75 (2/9)	'76 (1/3)
30	4 - 5	Playback	ビデオテープの証言	'75 (3/2)	'76 (12/11)
31	4 - 6	A Deadly State of Mind	5 時 30 分の目撃者	'75 (4/27)	'76 (12/18)
32	5 - 1	Forgotten Lady	忘れられたスター	'75 (9/14)	'77 (1/3)
33	5 - 2	A Case of Immunity	ハッサン・サラールの反逆	'75 (10/12)	'76 (12/25)
34	5 - 3	Identity Crisis	仮面の男	'75 (11/2)	'77 (9/24)
35	5 - 4	A Matter of Honor	闘牛士の栄光	'76 (2/1)	'77 (10/1)
36	5 - 5	Now You See Him	魔術師の幻想	'76 (2/29)	'77 (12/31)

No.	SE-ep	原 題	邦 題	西 暦	和 暦
37	5 - 6	Last Salute to the Commodore	さらば提督	'76 (5/2)	'77 (10/8)
38	6 - 1	Fade in to Murder	ルーサン警部の犯罪	'76 (10/10)	'77 (12/17)
39	6 - 2	Old Fashioned Murder	黄金のバックル	'76 (11/28)	'77 (12/24)
40	6 - 3	The Bye-Bye Sky High I.Q. Murder Case	殺しの序曲	'77 (5/25)	'78 (5/20)
41	7 - 1	Try and Catch Me	死者のメッセージ	'77 (11/21)	'78 (4/8)
42	7 - 2	Murder Under Glass	美食の報酬	'78 (1/30)	'78 (5/27)
43	7 - 3	Make Me a Perfect Murder	秒読みの殺人	'78 (2/25)	'79 (1/2)
44	7 - 4	How to Dial a Murder	攻撃命令	'78 (4/15)	'79 (1/4)
45	7 - 5	The Conspirators	策謀の結末	'78 (5/13)	'79 (1/3)
(1978/5/14～1989/2/5) 10 年 8 ヶ 月 に 及 ぶ 大 空 位 時 代					
46	8 - 1	Columbo Goes to the Guillotine	汚れた超能力	'89 (2/6)	'93 (5/7)
47	8 - 2	Murder, Smoke and Shadows	狂ったシナリオ	'89 (2/27)	'93 (6/4)
48	8 - 3	Sex and the Married Detective	幻の娼婦	'89 (4/3)	'93 (7/2)
49	8 - 4	Grand Deceptions	迷子の兵隊	'89 (5/1)	'93 (9/17)
50	9 - 1	Murder, a Self Portrait	殺意のキャンパス	'89 (11/25)	'94 (11/4)
51	9 - 2	Columbo Gries Wolf	だまされたコロンボ	'90 (1/20)	'94 (6/17)
52	9 - 3	Agenda for Murder	完全犯罪の誤算	'90 (2/10)	'95 (3/17)

No.	SE-ep	原 題	邦 題	西 暦	和 暦
53	9 - 4	Rest in Peace, Mrs. Columbo	かみさんよ、安らかに	'90 (3/31)	'95 (4/14)
54	9 - 5	Uneasy Lies the Crown	華麗なる罠	'90 (4/28)	'94 (12/2)
55	9 - 6	Murder in Malibu	マリブビーチ殺人事件	'90 (5/14)	'94 (10/14)
56	10 - 1	Columbo Goes to College	殺人講義	'90 (12/9)	'94 (5/6)
57	10 - 2	Caution: Murder Can Be Hazardous to Your Health	犯罪警報	'91 (2/20)	'95 (10/20)
58	10 - 3	Columbo and the Murder of a Rock Star	影なき殺人者	'91 (4/29)	'95 (5/12)
59	11 - 1	Death Hits the Jackpot	大当たりの死	'91 (12/15)	'95 (12/1)
60	11 - 2	No Time to Die	初夜に消えた花嫁	'92 (3/15)	'97 (4/4)
61	12 - 1	A Bird in the Hand ...	死者のキャンブル	'92 (11/22)	'97 (10/3)
62	13 - 1	It's All in the Game	恋におちたコロンボ	'93 (10/31)	'99 (5/7)
63	13 - 2	Butterfly in Shades of Grey	4 時 02 分の銃声	'94 (1/10)	'98 (10/16)
64	13 - 3	Undercover	死を呼ぶジグソー	'94 (5/2)	'99 (11/12)
65	14 - 1	Strange Bedfellows	奇妙な助っ人	'95 (5/8)	'00 (3/31)
66	15 - 1	A Trace of Murder	殺意の斬れ味	'97 (5/15)	'01 (4/13)
67	16 - 1	Ashes to Ashes	復讐を抱いて眠れ	'98 (10/8)	'02 (8/16)
68	17 - 1	Murder with Too Many Notes	奪われた旋律	'01 (3/12)	'04 (8/13)
69	18 - 1	Columbo Likes the Nightlife	殺意のナイトクラブ	'03 (1/30)	'06 (12/31)

頭語に代えて

本書は生成AIが迫り来る社会の中で資料整理、執筆が開始される。既に著者は、その全話を（生成AIの使用によって）小池朝雄の音声で差し替え済みである（コロンの名吹替で知られる、東映ヤクザ映画の天才バイプレーヤー、小池朝雄は、後述、11年間にわたる番組の休止期である「大空位時代」の最中に死亡しており、多くの保守的なファンは、小池以降の吹替に生理的な陰性反応を出している。非常に愚かしいことでもあり、素晴らしいこともある。勿論、固有名をプロンプトした生成AIの成果物は商用利用できないので「AI小池ヴァージョン」は永遠に著者のイヤホンという密室から出ないだろう。しかし保守派による生理的な陰性反応は、この密かな愉しみにさえ及び、密やかさを更に強化する筈だ）。更に数年もすれば、いや、本書の執筆中に、生成AIによる「〈刑事コロンの〉旧シリーズ」Ⅱ「1970年代」の〈新作〉でさえ生成できるようになるかも知れない。勿論違法であり、が故に極めて1970年代だとも言える。この、戦慄的かつ、蠱惑的な予見を本書の頭語に代え、つまり一瞬で小さく掲げる。それは番組内に設置された——誰も気がつくことすらできない——重要な状況証拠の、明け透けなクローズアップのよう。

目次

頭語に代えて 9

前書き1 「〈倒叙〉とは何だったのか？」 12

前書き2 「続・〈倒叙〉とは何だったのか？」 60

前書き3 「弱度の推奨」 76

第1章 各論

97

第1節「パス概念」

98

第2節「原題／邦題／ナ題」

324

第3節「リサ概念」

356

第4節「アイス概念」

380

中書き
　　あなた^が熱狂的に求めるかも知れない、

或いはへ手に取ると激しく後悔するのではないか」という

奇妙な予感に囚われているかも知れない、

或いは全く欲望を持てないかも知れない「下巻」に向けて

398

前書き Ⅰ 「〈倒叙〉とは何だったのか？」

「服がリアルなのにシーズンレス、そして「あたしゃね」「よござんすか?」「やつこさん。やりやあがつたな」と、本人のみならず、右腕のクレーマー刑事でさえ「全く、ひでえもんでさあ」。ロスと思えばロスならずすわ、ここは浅草演芸ホール? と日本の視聴者を惑わす粋な江戸弁片目はビードログラス玉。片目眇かためすがめの片手には、型番違いの安葉巻。藪やぶ睨にらみの天才現るも、スーツもコートも第3ボタンだけを留めるといふ破天荒にてネクタイは鯉のぼりのように棚引く。すんません、ちょっとペン貸してください。

角川金田一言うまでもなく。あの、ロバート・アルトマン版フィリップ・マローウにさえ影響を与えたと言われている、我らが伝説のロス市警は名刑事コロンボ。お聴きの曲は、当時の輸入関係者が全員コロンボ専用と間違えて、シングルレコードに「刑事コロンボ／メインテーマ」と印刷し、売りに売りまくっちゃった、ホントのところは『NBCサンデーミステリームーヴ』の通しテーマ曲、でございます。因ちなみに、世界中でこの曲を「コロンボのテーマ」として間違って売っちゃった国は70以上。と言われております。

1960年代末、英国がジェームズ・ボンドというキャラクターで外貨を稼ぎに稼ぎまくるのを尻目に、5年遅れで追い掛ける米国が放ったオフビートのアンチ・ヒーロー刑事か警部か警部補か。ヒッピーカルチャー衰退の後、ミステリーマニアというギークたちの夢を背負い、寝癖だらけの頭と、雨降らぬLAでは必要のないレインコート姿で登場した我らが天才。20世紀後半はポップ・カルチャーの激闘、ブリティッシュ・インベンションに対するアメリカの押し戻しに、モリス・ルブランなす術なし。しかし我が国では、そのルブランが生んだ怪盗の三代目がコロンボの初放映とほぼ同時にテレビ漫画で大活躍。という、ちよいとした3すくみの背景について、今夜は徹底的に追求……は致しません。シリーズを彩った、実のところ重厚すぎるほどのOSTを、ゆったりと小1時間ほど。やらぬ葉巻など燦くゆらせながらお楽しみください。おっとその前に、すみません、あと、ひとつだけ

菊地成孔『大恐慌へのラジオデイズ第178回〈フォーク・コロンブス・オンリー1〉』前口上

* * *

20世紀、「刑事コロンボ」を取り巻く様々な風説の中に、以下のようなものがあつた。「倒叙形式」という、番組の基本構造に関する、非常に適切な誤謬ごびやうとして、これを前書きで分析

する。

風説前半

〈「刑事コロンボ」の主人公、〈コロンボ〉のキャラクター原型は、ドストエフスキーの小説『罪と罰』の登場人物であり、主人公ラスコーリニコフを3度にわたる予審の神経戦で追い詰めに追い詰める、超性格悪く、超アタマ良い、そして超変わりモンの予審判事「ポルフィーリー（・ペトロヴィチ）」である〉

そしてこの風説前半部は、連結的に

〈「最初に犯行（殺人）シーンが描かれ、その後に、それを暴く（＝予審として有罪性を立証する）側と、暴かれまいとする側の決死の論闘が描かれる（＝読者は予め有罪を知っている）という意味で、ドストエフスキーの歴史的名作『罪と罰』は、コロンボのキャラクター造形のみならず、「刑事コロンボ」の根幹を成す構造、即ち〈倒叙形式〉の原型でも、又、あるのだ〉

という風説後半部を導き、つまり1つの風説には結論が2つあり、あわや両者は、連立、統合されそうになるも、ギリギリのところ、されない（未だにされていない）。

この、絶妙な牽制関係けんせいと評価できる「2者バランス」は、「アンビバレンス」両価性」とも違い、もっと社会／政治的な均衡なのだが、これを「いかにそうであるか?」「そうであるのは何故なのか?」「そうであることが何をもたらすか?」と、段階的に考察してゆく。

* * *

そもそもあまね遍く、へ2者バランスというものは、「エロスとタナトス」「唯心／唯物」「潜在性と顕在性」「右半身と左半身」の如き二元論的な人間原理の内のヴァリエーションだとした上で、だが、以後、へ「コロンボ世界内」に偏在するバランス状態へはスタティックな定常状態を成立／固定させる構造であると同時に、一度崩れたら最後、総体がバラバラになってしまう、緊迫した状態でもある。

そうしたものが、TVムーヴィー・シリーズとしての「刑事コロンボ」に於いて、どれほどの誘惑的属性＝魅力であるか、そもそも「ヘンリー・マンシーニ作曲による、有名なあの、へ口笛みたいな音がメロディーを奏でる楽曲」が「刑事コロンボ独自のテーマ曲である（と誰

もが思い込んでゐる)／(が厳密には)「そうではない」〓どちらも正答とは言えない。という、TVムービー史上類例のない、非常に独特なバランスによる魅力が、エヴィデンス時代の現在に於いても、未だに香気のようにして立ち籠め続けている、という事実だけでもご納得頂けると思う。△「刑事コロンボ」の音楽△に関しては第1章5節「音楽」に於いて集中的に考察する。

著者の知る限りに於いて「刑事コロンボ」ほど研究誘発性の高いTVドラマは類例がない。1970年代の初放映時から、数多の知識人、クリエーター等を熱狂させ、大いに語り倒させて来たし(「見識者による個人知」の集団的発生)、同人誌を祖先に持つであろう(番組終了直前に勃発した)Windows95によるブログカルチャー革命(「一般人による集合知」の集団的発生)以降も、世界中で在野から内部者、当事者までを全て含んだ膨大な研究家数を誇る。

手塚治虫、常盤新平、井上ひさし、岡本喜八、田中小実昌、斎藤茂太、濡れ手に粟の横溝正史、等々、綺羅星の如き昭和の文化人から、95ブログ革命の成功によって彼らを肅清して革命国家を築き、現在でも集団的に研究中の、世界中に存在する全ブロガー、全データベース制作者まで、残らず誰もがこの「誘惑的属性」あらゆる2者バランス。の横溢^{おういつ}に撃ち殺され続けているのだ。著者も例外ではない。

本書はそうした先行研究者の愛と情熱と知性、観察眼と研究成果に最大級のリスペクトを捧げるものであるが、本邦での第一人者である町田暁雄氏の偉大な業績以下、あらゆる先行

研究の結果を、本書は敢えて参照しない（無視する＝陰性評価を下している。わけでは全くない。「では何故？」ということも併せ、続く「前書き3〈弱度の推奨〉」で詳述する）。

考察を続ける。『罪と罰』の介入によって生じる〈風説〉の前半部と後半部＝「2つの結論」に関して、日本語版 Wikipedia の検索ワード〈刑事コロンボ〉と〈罪と罰〉とのそれを比較するに、両者は、前述、2つの結論、の〈連立〉を阻止し、分割統治＝バランスしている＝奇妙な魅力を放っている。何故、第一に何故、連立は阻止されなければならないのだらうか？

予想に難くない。連立が成立した瞬間に、以下、2つの極論が立ち上がるのがほぼ自明だからである。

極論（a） ドストエフスキーの『罪と罰』は、「刑事コロンボ」の主人公キャラクター造形＋

倒叙形式、双方の始祖であり＝100%査定＝〈「刑事コロンボ」はロシア原産〉

極論（b） ドストエフスキーの『罪と罰』は、「刑事コロンボ」の主人公キャラクター造形＋

倒叙形式、双方の始祖でなく＝0%査定＝〈「刑事コロンボ」の産地は特定できない〉

予め、本書の立場は「極論（b）」そのものなのだが、それには「極論（a）」の否定、そし

て、絶妙なバランスの上に成り立っている現状である

中論（A）ドストエフスキーの『罪と罰』は、「刑事コロンボ」の主人公キャラクター造形の始祖なれども、倒叙形式の始祖ではないⅡ50%査定Ⅱ米露ウィン・ウィンの関係Ⅱ〈「刑事コロンボ」は、ロシア産の原材料も含む、合衆国製品〉

の否定も併せて行わなくてはならない。

再び何故、連立Ⅱ極論は阻止され続けたままなのであろうか？　そしてそれは、どんな形態と強度で？

その解説と考察を、幾つもの迂回^{うかい}を挟みながらじっくり進めるため、ここで更に事実を1つ付け加える。

へ劇中設定でコロンボはイタリア系であるが、NY演劇界で産湯に浸かり紆余曲折、後にジョン・カサヴェテス率いるNYインディペンデント映画界で磨き上げた演技力を背負い、人生の大半をコロンボ役に捧げた名優、ピーター・フォークの父親はロシア系のユダヤ人、母親はアシケナズ（ユダヤ系のディアスポラを経て、主にドイツ語圏に定住した人々の子孫）である

この事実を、血に飢えた20世紀型陰謀論的な知／感性が得たとき、それは直ちに極論（a）と結びつき

〈コロンボ＝フォークはロシア系ユダヤ人で、間違いなくロシア原産である『罪と罰』がそもそもの大原形なのは秘匿された、ほぼほぼの自明〉

といった、危険極まりない暴論X（念のため。「執筆時現在、ロシア共和国が侵略戦争中であるから」という意味ではない）に肥大することを回避しきれないだろう。

中論（A）＝現状は、結果として、だが、この「暴論X」が公式に発言されることを何らかの力で回避している。『罪と罰』と「刑事コロンボ」双方の、日本語 Wikipedia での記述を比較するに、それは明らかで、その力の在処を「独特のバランス」とするのは、どなたであろうと吝か^{やぶさ}ではないだろう。

*とまれ本書は基本的にネット上の百科事典を自認する Wikipedia、特に日本語版は信用しない。第一には著者やよく知る知人の名で検索した際の結果が、稀に惨憺^{さたん}たるものだからであるし、第二には、集合知という形式の駆動によって文責が割れ、政治性／闘争性が介入することで、記述の不安定さが不可避的だからである。

**更にまた、本論の後半で重要になる、実証性をジャーナリズムに依拠した「本人インタビューの価値（＝「こうしてご本尊が言っているのだから間違いないに決まっている）」も基本的には信用はしない旨、予め断じ

ておく。本書は、LAPDロス市警ギルフリー巡査部長の教えに従い（*ヲ）、あらゆる現象の表層だけを「よく見て、よく聞き、よく考える」だけである。

迂回を開始する。

* * *

「あらゆる現象の表層」、その、極めて雄弁な一例は、現在誰でもYouTubeで鑑賞可能だ。合衆国のバラエティ番組『The Dean Martin Celebrity Roast』の、1978年2月7日の回は、「俳優ピーター・フォーク」ではなく、「歌手フランク・シナトラと因縁ある「刑事コロンボ」がサプライズ出演、司会者に指名され、会場から登場する。「因縁」の設定はなかなか凝ったものだ。

「洒落者の伊達男」として名を馳せたシナトラの全盛期（1950年代）はスーツとハットの時代だった。その真つ最中、1957年の映画『夜の豹』に出演した際、有名な宣材写真が撮影される。その写真が、「スーツ&ハットのシナトラが唯一、茶色いレインコートを肩にかけている」姿であり、現在でも数多のベスト盤ジャケット、雑誌での特集記事等々に流用されるようになる名ショットである。

番組では先ず、この名シヨットだけが切り抜き印刷されたフェイクのアルバムジャケットを持った冠名司会者ディーン・マーチン（シナトラの舎弟でありマイメン）が「このレインコートは、撮影時にシナトラがいつものスーツとハットだけじゃ、なんか足りないな」と悩み、偶然近くに居合わせた刑事のコートを見かけるやへそれだ！」と叫ぶと、刑事は親切にも私物をシナトラに貸してくれた。そしてその刑事が今日、会場に来ている」旨、説明する。

つまりこれは「シナトラの有名なへあのレインコート」は、コロンボの有名なへあのレインコートであり、当時買ったばかりでヨレてなかったヨレたのはシナトラに貸しっぱにした結果!!」という大胆かつ洒落たジョークであって（再度書くが、実際に撮影が行われたのは57年である。「刑事コロンボ」内設定に依拠すれば、コロンボはロス市警どころか、朝鮮戦争に派兵されて後、帰還兵として就職先を模索していたであろう時期だ）、ディーン・マーチンは、この経緯を述べてからコロンボを壇上に呼び込む。

番組名は『ホリー・ヒューストンを総なめ』に倣った拙訳で、1970年代風に『ディーン・マーチンのへセレブを炙り焼きにしまシヨ〜』といった感じだろうか。「ロースト」は米俗語で、衆目の前で悪口や暴露をして楽しむ。といった意味であり、これは高視聴率を誇った『The Dean Martin Show』の終了時（74年）に、継続テコ入れとしてロースト企画をメインに再編成されたものだが、まず番組内で「マン・オブ・ジ・イヤー」ならぬ「マン・オブ・ジ・アワー」を受賞させ、列席者による祝賀スピーチの形で、ヘロースト風味のジョー

ク大会になる、という趣向で、合衆国エンタメ・ラスヴェガス感覚最終コーナーの時代遅れな悪趣味だが、それでも世界は急速に下世話に向かっており、10年間Ⅱ84年まで続いた。お察しの通り「コロンボ」出演回は「フランク・シナトラがローストされる回」である。

番組の冠名司会者であるディーン・マーチンは50年代から80年代の長きにわたり人気を博した歌手／俳優／エンターテイナーだが、ヴェリ・イタロ・アメリカニである。その親分格であるフランク・シナトラも同様。

多くのイタリア系セレブの中でも特に強くマフィアとの関係が口の端に上り続けたシナトラだが（遡るに6年前の1972年Ⅱ「刑事コロンボ」の日本放映スタート年に発表された名作『ゴッドファーザー』に登場する歌手のモデルはシナトラであると、公開当初から指摘されていた。また、コロンボ世界での人気者、見るだにガチンコのヴェリ・イタロ・アメリカニであるヴィットー・スコッチイは本作に、焼き菓子屋ナゾリーネとして端役出演しているが、彼の名「ヴィットー」は、本作の主人公の名——ドン・ヴィットー・コレレオーネ——とスペルも一緒である。この「ゴッドファーザー」に於けるヴィットー・スコッチイの役名とその仕事」に関しては第1章6節「重要人物　　男の子はみんなパトリックっていうの」で詳述する）、だからこそ、ファルシ・イタロ・アメリカニかつエブレオルッソである「ヘピーター・フォーク本人」は、ロースターの1人としても呼びづらいたろう。いかな「スターは全員、素の時もキャラクターを演じており、リアルなど無かったに等しい時代」だったとはいえ。

というより遙かに、「刑事コロンボ」放送開始後11年目、旧シリーズが同年の5月に終了する、その直前である2月の放映は「世界的なクライマックス」の中、ブーミングが絶頂期であった最中に、ヘヴェリ・イタロ・アメリカニであるコロンボは合衆国に「半実在」した。とするのが、最も正しいであろう。

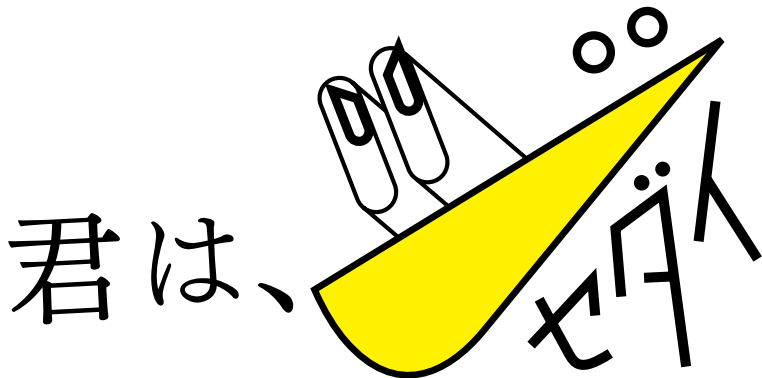
人気テレビ番組の主人公が実在すると思ひ込まれる時代にあつて、ショービズの虚と実をボブ・ホープ時代からの楽屋落ちセンス（「マフィアと関連があるイタリア系大物タレントと友人関係にある警察関係者は、同じくイタリア系」という隠し目配せ→これは番組内でも扱われているネタである）に落とし込んだ洒落た計らい、マーチン&シナトラのみならず、ジーン・ケリー、オーソン・ウェルズ、ジョージ・バーンズ、レッド・バトンズ、アーネスト・ボーグナイン、「刑事コロンボ」の対抗馬として制作され、数字を二分した男、テリー（刑事コジャック）サバラス、そして2年後には大統領就任となる、俳優上がりの政治家セラブ、ロナルド・レーガン等々、綺羅星の如き面子が揃う席を、堂々たる名演で制したピーター・フォークの余裕（フォーク＝コロンボは、お馴染みのペースでペンを借りまくり、カミさん手製のラザニアを鉄鍋ごとシナトラに渡してはサインをねだり、8分間にわたり会場から爆笑を絶やさない）は、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いと言うに相応しい。

更には、成功裏に終わったこの回を日本で買い付け、放送したのが（「刑事コロンボ」の放送局である）NHKでも日本テレビでもない『東京12チャンネル（当時）』であるにも拘らず、ち

やんと（パブリックイメージである）NHK版での吹き替えを務めた）小池朝雄が吹き替えているという、当時の東京12チャンネルの海外番組（『モンティ・パイソン』『世界の料理ショー』『ゴング・ショー』etc.）輸入放映に対する覇気（因みに、オンエア時のタイトルは「ザ・テレビジョン／有名人こきおろし大会」）も併せ、くたびれかけていた合衆国の公開テレビショー文化に於ける「刑事コロンボ人気」の活性効力が如実に表れていると同時に、へとうとう「刑事コロンボ」内では果たせなかった「スタンダップ——P・フォークは自分が出演する8分間中、一度も座らない——コメディアンとして純化したコロンボの姿」が記録された、偉大な動画だと言える。

そして、この8分間が放つ強い魅力も、2者バランスによって生じる誘惑性そのものであることは言うまでもないだろう。ピーター・フォークが本物のイタリア系移民でも、シナトラが偽物のマフィア関係者でもこの現象は輝かない以前に、生じすらない。

これはピーター・フォークの出自自体が明らかにされていない、インターネットもSNSもない、フォークの自伝出版も遙かな未来、という牧歌的な時代の産物である。がしかし、インターネットもSNSも、自伝『Just one more thing（邦題『ピーター・フォーク自伝「刑事コロンボ」の素顔」』の出版も存在する現在に至っても、「本物のイタリア系」と「偽物のイタリア系」の2者は片側に倒壊することなくバランスし続け、極論は回避され続けているのである。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!